

## 葦手絵と和歌と

冷泉家時雨亭文庫の『元輔集』をめぐって<sup>①</sup>

Claire-Akiko Brisset

パリ第7大学で私が去年終了した博士論文のテーマは葦手を中心としたもので、テキストとイメージ、つまり文学と美術の関係であった。その研究は、日本の美術史における葦手絵というクリプトグラフィーがどのように機能しているか、その構造がどうなっているかを明確にする試みであった。

「葦手」という言葉は10世紀前半から文献によく出て来るが、その当時の定義はまだはっきりしていない。「葦」のような形に書いた字の意味とされ、普通は主に平安時代に流行した文字の戯れ書きの一種、又装飾模様的一种とされているが、その実体は現在明かではない。要するに、佐野みどり氏が推測するとおり「〈葦手〉の用語は、本来は書体の一種を指す用語であったと考えられるが、しだいに装飾下絵に使われる絵文字や隠し文字のようなものを指す用語へと変わってきた」<sup>②</sup>。このように絵と文字が密接に結び付いた葦手は11・12世紀には装飾的なモチーフとなり、記録によると料紙の下絵だけでなく、蒔絵工芸品、衣類、いわゆる装飾経、つまり写経の料紙に何らかの装飾を加えて経典書写したもの、の飾りにも用いられるようになったと考えられている。葦手は現在二つに分類されている。まず、絵文字という、鳥が跳ぶ姿で描かれている仮名のような、絵の形に見立てられた文字がある。そしてまた、字音絵と呼ばれている、例えば「わ」という音を示す片輪車の絵、「へ」という音を示す「へい」つまり瓶の絵などのような、言葉の音節を表わすために絵の中に描かれた絵画的模様が二つ目のタイプである。

現存する、最も古い葦手作品の中では、11世紀後半・12世紀初頭のものとして、伝藤原公任筆『葦手歌切』<sup>③</sup>などが典型的な絵文字の例である。これは徳川美術館の『古今和歌集』春歌上部の歌(27)を書写した断簡である<sup>④</sup>。

にしてらのほとりのやなきをよめる 僧正遍照

あさみとりいとよりかけて白露をたまにもぬけるはるのやなきか

上の句の「あさみどり」の「あ」は上の部分が葦の葉の形をして、下の句の「ぬける」の「ぬ」は鳥の飛ぶ姿をあらわし、「の」は鳥が首を羽にかき込んで、一本足で眠る姿で、「やなぎ」の「や」はまた鳥が飛ぶ形に描かれている。「あ」「ぬ」「の」「や」という文字は、歌のほかの部分に使われている普通の書体に対して目立つように絵画化された。和歌全体が四行で写され、その行は一種のカリグラム(つまり、ある詩の内容のものその形をその配置で描いたもの)として題の「やなぎ」の「糸」の形をなんとなく思わせる。この葦手絵文字はまた数珠のようにその「糸」を通した「白露」の「たま」を連想させるのではないだろうか。

古筆のほかには、12世紀になってからこの種の絵文字は景色の絵画的要素にも組み合わされ、装飾的なモチーフとして料紙下絵に使われるようになった。12世紀初頭の成立と思われる西本願寺本『三十六人家集』は葦手下絵が多いので有名だが、例として「元真集」をあげたい。華麗な装飾料紙の右の下方に大きい字音絵の瓶、つまり「へ」が二つ、それから水面に浮かんでいるような水鳥の形をした「る」の絵文字などが単なる装飾模様として添えられている<sup>⑤</sup>。この2種の葦手は料紙下絵、装飾経などのような12世紀の美術品によく見られ、この『三十六人家集』のようなケースが一番多いのだが、風景的な図柄に組み入れられて「判じ絵」的な葦手絵をつくることもある。

原テキストの存在を暗示する葦手の判じ絵の中で、平安時代に書かれたもの

は、私が知る限り、現在2つしか残っていない。1つは、武藤家に所蔵されている『久能寺経』の「葉草喩品」見返絵で、1940年代に白畑よし氏<sup>⑥</sup>がこれを解説して、今この解釈が定着していると言えよう。図柄は、当時の『源氏物語絵巻』のモチーフを借り<sup>⑦</sup>、供人に傘をさしかけさせた公卿が、雨のそぼ降る風景の中に立つ場面で、「三草二木」や「慈雨」などの『法華経』「葉草喩品」第5の内容を絵画化したものと思われる。その絵には、又、字音絵の片輪車、鶴、荷物などが添えられている。そのほかに、漢字の「加」を草書体で書いて、岩に絵画化した絵文字があり、それから空には鳥が3羽飛ぶ様子が描かれている。藤原俊成の『長秋詠藻』（407）に載せた一品経和歌の中に

葉草喩品 無有彼此 愛憎之心（彼、此 愛憎の心、有ること無し）

という経文の一句を題として

春雨は此面彼面の草も木もわかずみどりに染むるなりけり

という歌があるが、これを絵画化したもので、歌の「わかずみどりに」の「わ」が片輪車、「加」が岩、「づ」が鶴、「みどり」（3つの鳥）が3羽の鳥、「に」が荷物で表わされている。法華経判じ絵として有名な作品である。

もう1つは、『久能寺経』と比べると余り知られていないが、冷泉家時雨亭文庫に所蔵されている『元輔集』という写本である。梨壺の五人として、また清少納言の父親として有名な清原元輔（908-990）の家集で、写本の後の見返しにある室町時代と思われる認め書き<sup>⑧</sup>から、八条院坊門局が写したものだと思われる。坊門局は、詳しい経歴は不明だが、父は御子左家流の藤原俊成で、母は従五位上民部少輔藤原顕良女の六条院宣旨、つまり俊成の従姉妹に当る人とされている<sup>⑨</sup>。坊門局は鳥羽院の皇女八条院暉子内親王（1137-1211）

に仕えて「八条院坊門局」と呼ばれた。また、応保・長寛年間（1161-1165）後白河院の近臣の藤原成親の妻となり、右馬頭の藤原公佐をはじめとして4人の子供を生んだ。

後の見返しの認め書きのほかにも、坊門局自身が巻末の見事な散らし書で書いた奥書に、「承安五年五月廿四日さい宮のおはします四条まちのこうぢ〈の〉みなみおもてのひむがしのつまどにてか〈き〉はてる」と説明しているから、西暦の1175年に書いたことが分かる。田中登氏によるとこの「さい宮」というのは、後白河天皇の皇女亮子内親王（1147-1216、後の殷富門院）で、「亮子内親王は保元元年（1156）4月、齋宮に卜定されたが、同3年8月には父帝の讓位により退下。〈『明月記』によれば〉承安5年時点では四条町小路に住んでいたらしい。坊門局の妹である建御前（八条院中納言とも）が後にこの亮子内親王に仕えていることから推して、この頃坊門局自身も亮子内親王に出仕していたものと思われる」<sup>⑩</sup>又、坊門局は定家にとっては異母の姉に当る人だが、年の差はよく分からない。浜口俊裕氏<sup>⑪</sup>の説に基づいて20歳ぐらいの差だったと考えている。これによれば、元輔集を写した時、坊門局は30代の後半、定家はまだ14才の少年だったということになる。

古筆の世界では、この坊門局の筆と伝える作品がいくつかあって、特に関戸家旧蔵の『唯心房集』などが確かにその手になったものとされているが、俊成が片仮名の小字で加筆したものであることが明らかになっているから、その書写作業が、父の俊成の監督の下に行われたと思われ、貴重なものである。同じ筆である、冷泉家時雨亭文庫の『三十六人集』の中では、この『元輔集』のほかに五つの家集、つまり『兼輔中納言集』『源順集』『平兼盛集』『能宣集』『源重之集』、の写本が所蔵されているが、その書写は全て『唯心房集』と同じように俊成の依頼によって坊門局が転写したものと思われる。坊門局が冷泉家に伝来する『三十六人集』の書写作業に積極的に参加していたのである。その写本は後に定家の手に渡ったものと推測されている。なぜかという、例えばこの『元輔集』には訂正書き入れが見られるが、その大部分は坊門局自身の手に

なるものである。但し、「太字で重ね書きにしている所は定家の書き入れ」<sup>⑫</sup>と考えるべきであろうし、また『拾遺和歌集』の略語に使った「拾」という集付などの書き入れも定家自身が加えた可能性が大きいとされる<sup>⑬</sup>。

又、外題は表表紙中央の上寄りに『元輔集』と定家様に大きい太字で記されているが、定家自身の手になるものか、また定家時代の別の人の筆跡なのかは断定はできない。いずれにしても、表紙全体は本文の書写年代をやや下る時期のものとして推定されている。

その表紙のもう一つの著しい特徴は、表表紙（図1）と裏表紙（図2）には、飛雁、岩、葦、鶴、片輪車、水鳥、瓶などのモチーフからなる、秋の水辺の風景が丁子で描かれている。これらのモチーフは何らかのテキストを葦手に写し変えたものであるということが一見してたやすく判読できるような体裁ではない。しかし、幸いにこれについては、冷泉家第14代為久（1686-1741）の手になる、該本の扉に添えられた紙片があって、

此元輔集の表紙此時代の葦手歟推量に表の方なきわたるかりのなみだやと  
読解る、也裏の方ものおもふやどの萩のうへのつゆと読解る、也

と述べてある。つまり、冷泉為久は、この葦手絵が『古今和歌集』秋歌上部の有名な和歌（221）

題しらず よみ人しらず

鳴きわたる雁のなみだや落ちつらむもの思ふやどの萩の上の露

を絵画化した葦手判じ絵であると考えているのである。為久の解釈をもとにしてこの葦手絵を読んでみよう。

表表紙をよく見ると、

1) 上方に、雁の群れのほかには鳥が飛んでいる形が見えるが、これは先の



图1 冷泉家時雨亭文庫藏「元輔集」表表紙



图2 冷泉家時雨亭文庫藏「元輔集」裏表紙

- 『葦手歌切』に見られるものとよく似ている形で、「や」を表わしている。
- 2) 中段には左から右へ見て行くと先ほど説明した岩の形をした「加」、又『葦手歌切』のものによく似ている一本足で眠るような鳥の形の「の」、それから岩の様子に描いた「奈」という字、又「薬草喻品」見返絵のような「わ」という音を表す片輪車が描かれている。
  - 3) そして中段と下方の間の水辺に沿って見て行くと、先の「元真集」のような水面に浮かんでいる水鳥の形の「る」、そのすぐ下に水辺の形に崩した「能」、それから葦の生い茂る中に岩の形の「奈」が3つあって、「薬草喻品」の「みどり」3羽の鳥と同じように「みな」あるいは「なみ」が読み取れる。

為久の考えが正しいという前提に立って解釈してみよう。中段の「奈」と「わ」、下方の「る」は第1句の「なきわたる」を写し変えるもので、上方の飛雁はそのままだに第2句の「雁の涙や」の「雁」を絵画化していて、また下方の「能」水辺、3つの「奈」岩、上方の「や」鳥は第2句の「雁のなみだや」を表わしていて、第3句に関するものは描かれていない。又、中段の「加」岩と「の」鳥は単なる装飾要素として扱うべきだろう。

今度は、裏表紙を見てみよう。

- 1) 上方に又空を飛ぶ鳥の形で書いた「や」、
- 2) それから中段には水鳥の形の「と」<sup>⑭</sup>又鳥の形の「の」がある。
- 3) 下方には瓶の字音絵が中央に据えてあるし、その上に鷺などのような脚と嘴の長い鳥の形で書いた「う」が見える。また、その下に左から右へ見て行くと先のような水辺の形の「能」を初めとして、葦の葉の姿に延ばした「徒」と「ゆ」が明らかに描いてある。

その葦手は、下の句の「おもふやどの」と「萩の上の露」を表わすものと推定できる。

表表紙の中段に書いてある「加」と「の」は別として、葦手の絵文字と字音絵は単なる装飾的なモチーフではなく、全て『古今集』の和歌の部分それぞれ

それぞれ表わしていると言えよう。表表紙の「雁」はそのまに原テキストの「雁」を絵画化しているが、注目したいのはその他は葦手がすべて表音的な役割を果たして、その一種の表音記号が紙の上に巧みに配され、秋の水辺の景色を描いていることである。つまり、『久能寺経』の「葉草喩品」見返し絵では、「春雨」や「草も木も」などのような俊成の歌の内容を絵画的模様によって描くのに対して、この葦手判じ絵は「雁」を別として『古今集』の和歌の内容をそのままに絵画的に表すわけではなく、その和歌のことは自体を扱うものである。ことばの音節をそれぞれ独立した葦手に写し変えて、その表音記号の葦手が、水辺という風景を通して『古今集』の歌に現われる秋の「やど」の風景に対応するものになっているのである。その点に関してはこの『元輔集』葦手絵は現存する葦手絵と違って<sup>16</sup> 王朝美術における判じ絵や字隠し絵の典型というよりも、むしろオリジナルな例外と見るべきではないかと思う。

この葦手判じ絵が『古今集』の歌を確かに暗示するという動かぬ証拠を提出することはできないが、その為久の考えが恐らく正しいのではないかと私は考えている。それに関する二つの点を最後に取り上げたい。

先ず、そもそもこれが葦手であるという為久の判断の妥当性についてであるが、王朝時代の遊戯的文化の環境に照らすと書写当時の貴族たちにとってはすぐ理解できる判じ絵だったのではないかと思われる。例えば、先に説明したものとほとんど同じ手法で歌と絵を組み合わせた例を、源俊頼（1055-1129）の『散木奇歌集』の中に見つけることが出来る。

故大殿の北の政所<sup>16</sup>より歌絵をたまはりて、これに歌よみあはせてたてまつれとありければ、庭にへといふものすゑたる所に、鶴むかひてたり、空に郭公なくを、女ながめてゐたるをよめる  
郭公なく一声をしるべにて心を空にあくがらしつる<sup>17</sup>

詞書に描写した歌絵の瓶（「へといふもの」と鶴というモチーフが字音絵として扱われて、俊頼の歌の中では「しるべ」の「へ」と「あくがらしつる」の「つる」という語尾を表わすものになった。つまり、類型的な絵画的模様を字音絵の表音記号に使うという記号操作はこの『元輔集』の葦手絵によく似ていると言えよう。従って為久の考えが書写当時の遊戯的な慣習を反映していると見ても差し支えないと思われる。

結論として、もう一つ問題となるのは、この判じ絵が表す歌が本当に為久が挙げているこの『古今集』の歌なのかということである。その点について、私は新編国歌大観全巻を調査してみたが、『元輔集』葦手の疑いのない「雁」「やどの」「うへのつゆ」を含んでいる和歌は、『古今集』のこの歌のほかには三首しか見つけることが出来なかった<sup>18</sup>。これらの和歌は時代の問題を別として、それほど知られていないものであるし、歌集にそれぞれ一回出て来るだけであるが、それに対して『古今集』の歌はとても有名である。『古今集』成立直前の、寛平末年（898）頃の撰集と思われる有名な『秋萩集』<sup>19</sup>にすでに載っているが、その後、紀貫之の『新撰和歌集』<sup>20</sup>を初めとして、藤原基俊の『新撰朗詠集』<sup>21</sup>に選ばれている。又、特に注目されるのは、藤原定家の非常に重要な歌論書、秀歌撰にしばしば出て来ることである。それは『定家十体』<sup>22</sup>、『近代秀歌』（再撰本）<sup>23</sup>、『詠歌大概』<sup>24</sup>、『定家八代抄』<sup>25</sup>、『八代集秀逸』（流布本）<sup>26</sup>などである。又、室町時代後期の飛鳥井家流の注釈書である『古今栄雅抄』は、この歌について、「古今集、秀歌十首、撰びて参らせよと後鳥羽院より定家卿に仰せ出ださるる時に、此歌、其一なり」と述べていて、片桐洋一氏が指摘するとおり、これをその通り「信用してよいのかどうか疑問だが、（…）〈この〉歌が、中世においても、名歌の聞こえが高かったことだけは確かだと思うのである」<sup>27</sup>。

『元輔集』の葦手判じ絵の原テクストとして誰にもすぐ分かる有名な和歌を選択するというのはありそうなことであるが、この場合問題となるのは、なぜこの『古今集』の「よみ人しらず」の和歌が『元輔集』写本の表紙に判じ絵的に描かれたのか、『元輔集』の内容と関係があるのか、関係があればどんな関

係であろうか、ということである。その解決困難な問題について注目されるのは、時雨亭文庫蔵本、また同系統の書陵部蔵本<sup>28</sup>どちらも天暦九年（955）に行われた内裏紅葉合の際に作られた秋の歌<sup>29</sup>から始まることである<sup>30</sup>。空想的かも知れないが、定家自身、あるいは定家時代の別の人<sup>31</sup>がこの『元輔集』を手に入れて、その表紙を葦手判じ絵で装飾しようとした時、家集が秋の歌から始まることに注目して、秋を題とするほかの和歌をさがし、『古今集』の「題しらずよみ人しらず」のこの歌を秋の代表歌として選んだのではないと思われる。そのように考えた場合、この表紙の葦手を通して『元輔集』と『古今集』の間に一種の詩的なネットワークを作り出したと言えるのではないだろうか。

#### 主要参考文献

- 石田吉貞『藤原定家の研究』改訂版、東京、文雅堂書店、1969年  
片桐洋一『古今和歌集全評釈』講談社、1998年  
藤本一恵『清原元輔集全釈』東京、風間書房、1989年、私家集全釈叢書 8  
後藤祥子『元輔集注釈』東京、貴重本刊行会、1994年、私家集注釈叢刊 6  
片桐洋一・田中登解題『冷泉家時雨亭叢書 第16巻 平安私家集 三』東京、朝日新聞社、1995年  
小松茂美『平家納経の研究』講談社、1976年、再版松原茂、島谷弘幸、前田多美子ほか編『小松茂美著作集』第14巻、旺文社、1996年  
小松茂美『平安時代倭絵の探究—法華経冊子の研究』東京、講談社、1986年  
佐野みどり『風流造形物語—日本美術の構造と様態』東京、スカイドア、1997年  
白畑よし「歌繪と蘆手」『美術研究』125号、1942年、12-25頁  
白畑よし「法華経歌絵に就いて」、『美術史学』88号、1944年、109-118頁  
浜口俊裕「新出の冷泉家時雨亭文庫蔵本『元輔集』について」、『大東文化大学紀要』〈人文科学〉第35号、1997年、1-27頁  
四辻秀紀「葦手試論」『國華』1038号、1980年、7-23頁

#### 【注】

- ①この小論はバリ国立東洋言語文化研究所の寺田澄江先生のご指導のもとで書いたものである。片桐洋一先生からもご意見を頂いた。先生方に厚くお礼を申し上げたい。
- ②佐野みどり『風流造形物語—日本美術の構造と様態』東京、スカイドア、1997年、119頁。
- ③小松茂美『平家納経の研究』講談社、1976年、再版松原茂、島谷弘幸、前田多美子ほか編『小松茂美著作集』第14巻、旺文社、1996年、305-307頁などを参照。
- ④下線の部分は絵文字のところである。
- ⑤当時この瓶のような字音絵は絵文字とともに既に定型化されていたと考えられる。

- ⑥白畑よし「法華経歌絵に就いて」『美術史学』88号、1944年、109-118頁。
- ⑦徳川美術館の『源氏物語絵巻』「蓬生」という場面などを参照。
- ⑧「右元輔集坊門局筆外題京極殿」
- ⑨但し、石田吉貞氏によるとその点は疑問のままに残っているとされている。石田吉貞『藤原定家の研究』改訂版、東京、文雅堂書店、1969年、25頁を参照。
- ⑩片桐洋一・田中登解題『冷泉家時雨亭叢書 第16巻 平安私家集 三』東京、朝日新聞社、1995年、33-34頁。
- ⑪浜口俊裕「新出の冷泉家時雨亭文庫蔵本『元輔集』について」『大東文化大学紀要』〈人文科学〉第35号、1997年、1-5頁。
- ⑫注⑩書、田中登解題、34頁。
- ⑬同前、34頁。
- ⑭その鳥の形をしている「と」は、小松茂美氏が絵文字の例として挙げていて、当時の作品によく見られるものである。『小松茂美著作集』第14巻、351頁などを参照。
- ⑮平安時代の筆手というよりも、例えば冷泉為恭（1823-1864）が作った遊戯的な歌絵、あるいは西洋のカリグラムに近いと言えよう。特別展『歌絵』和泉市久保惣記念美術館、1995年、「逢う坂の」歌絵（出品番号76）、113頁などを参照。
- ⑯故大殿とその北の政所というのは、明らかではない。関根慶子氏によれば摂政・関白の藤原師実（1042-1101）と源麗子（?-1114）に当る人で、小松茂美氏の説に基づいてその子、関白の藤原師通（1062-1099）と右大臣藤原俊家の娘に当る人とされている。関根慶子編『散木奇歌集・集注篇』第1巻、東京、風間書房、1993年、210頁、小松茂美『小松茂美著作集』第14巻、281頁などを参照。
- ⑰源俊頼『散木奇歌集』夏部、255。同集の秋の部（395）、恋の部（1110）、恋の部（1162）なども参照。
- ⑱大内正弘（1495年没）『拾塵和歌集』巻第8、雑歌上、837（野萩）「むかしたれ物おもふ宿の跡ならん雁なく野への萩の上のつゆ」  
下河辺長流（1686年没）編『林葉累塵集』秋歌上、423（題しらず、田辺通直妻）「物おもふ宿をよくべき雁がねのねたくもおとす萩の上のつゆ」  
藤原為家『為家集』秋歌、701「初かりの涙もいまやわが宿の草葉の上の露のふかさは」
- ⑲『秋萩集』2（久曾神昇編『平安稀翻撰集』古典文庫60、1952、7頁）。書写の筆者は小野道風と伝承されて、仮名の成立の名筆である。草仮名で書かれていて、この後女手に移る過渡期の古体を示し、和歌史研究上からも書道史上からも尊重されている。
- ⑳紀貫之『新撰和歌集』巻第1春秋、88。
- ㉑藤原基俊『新撰朗詠集』上・秋、321。
- ㉒『定家十体』幽玄様58首、8。
- ㉓『近代秀歌』41。
- ㉔『詠歌大概』32。
- ㉕『定家八代抄』巻第4、秋歌上、324。
- ㉖『八代集秀逸』2。
- ㉗片桐洋一『古今和歌集全評釈 上』講談社、1998年、853頁。
- ㉘『元輔集』は二類に分類することが出来るが、この冷泉家時雨亭文庫蔵本は現存諸伝本の中では第一類の（1）宮内庁書陵部蔵定家系三十六人集（501・126）と同系統で、本文には若干の差しかなく、歌序も巻末の識語と奥書も全く同じもので、書陵部蔵本が時雨亭文庫蔵本を親本として成立し

たと考えても間違いはないと思われる。注⑩書、田中登解題、35-37頁。浜口俊裕注⑪論文も参照。

- ⑲村上の御時、殿上に紅葉合せさせたまふに「おもひやるくらぶの山の紅葉ばにおとらぬものは心なりけり」
- ⑳又、巻頭にはこの『古今集』の歌に近い、「露」「涙」「萩」などの題材を扱ったもの（4番、5番、8番など）が並んでいる。例えば、第4番目の「くら人どころのおのこども、河原に涼みにまかりてはべりしに 吹く風は涼しかりけり草しげみ露もいたらぬ萩の下葉も」があるが、ほかの伝本系統（正保版歌仙家集本系・西本願寺本系）によれば、下の句が少し違って、「露もいたらぬ萩の下葉も」になり、『万葉集』の秋の歌（巻第8、1575）「雲の上に鳴きつる雁の寒きなへ萩の下葉はもみぢぬるかも」や同集の（巻第8、1617）「秋萩に置きたる露の風吹きて落つる涙は留めかねつも」などにも近いと考えられる。又、『元輔集』を読んで行くと、第94番目（宮内庁書陵部蔵本の84番に当る歌）の「順が子なくなしてはべしとぶらふとて 思ひやる古古比のもりのしづくにはよそなる人の袖もぬれけり」という和歌があるが、それは梨壺の僚友の源順が子を亡くしたので元輔が贈ったものである。『源順集』には元輔のこの歌は載っていないが、同集119番に「応和元年（961）七月十一日に、四つなる女兒を喪ひて、同じ年の八月六日に又五つなる男を喪ひて、無常のおもひ、事に触れて起こる。悲しびの涙乾かず。古万葉集の中の歌弥満誓がよめる歌の中に、世の中を何に喩へむといへることをとりて、かしらに置きて詠める歌十首」として、歌群が128番まで収められている。その第1番目の119番は、「世の中を何にたとへむあかねさす朝日さすまの萩のうへの露」で、この『元輔集』の表紙に筆手によって描いている『古今集』の「よみ人しらず」の歌に近い。
- ㉑『元輔集』と似ている、筆手を入れた定家時代のほかの古筆下絵が現存する。例えば、定家自身とされる徳川美術館の古筆手鑑「鳳凰台」所収「紫式部集切」などが挙げられ、この『元輔集』筆手絵はその時代の慣習を反映すると言えるだろう。

#### \* 討議要旨

ニールス・グェルベルク氏は、「筆手歌切」には下絵があるようだが、と尋ね、発表者は、塔と柳が描かれている、小松茂美氏は冷泉為恭筆、四辻秀紀氏は歌の書写年代をやや下る頃、と推定されている、いずれにしろ歌が先で絵が後である、と答えた。

林見平氏は、「元輔集」の表紙には、「なきわたるかりのなみだや」が全部書かれているのではないか（中段の左端「加」のすぐ右は「り」、外題の「集」の字をはさんですぐ右の笹の葉は「き」、そのすぐ左下の笹の葉は「た」、さらに下段、「能」のすぐ下の笹の葉も「た」という、ブリッセ氏が装飾としたその絵文字が全て筆手の表音記号で読める）、と鮮やかに指摘し、会場の参加者も発表者も同意した。

大黒貞明氏は、冷泉為久は「ものおもふ」から裏に書かれている、と言っているが、この点についてはどうか、と尋ね、発表者は、今後の課題にする、と答えた。